

元韻を通して見たo_2について

李, 潤基

九州大学大学院 : 博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1811270>

出版情報 : 文献探究. 54, pp.1-13, 2016-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

元韻を通して見たo₂について

李 潤 基

1. はじめに

一般的に上代特殊仮名遣いのo₁・o₂を表す漢字は、ともに日本漢字音としては-o形で現れる。しかし、両者は橋本進吉(1980)、大野晋(1953)、有坂秀世(1955)、森博達(1991)、早田輝洋(1998)等のように、音韻の違いによる区別であると指摘されてきたが、松本克己(1975)は変異音関係であると主張する。

o₂は主として中舌母音のような性格を持つ音素であろうと推測されてきた。それは、中国中古音において、o₁に該当する字の中心母音は共通してoが多く、o₂に該当する字の中心母音は共通してəが多いからである。o₂の字として多く使用された魚韻字はその中心母音がəであったと考えられ、なお、登韻の「曾」および魂韻の「存」等も、その中心母音はəであったと考えられる。原音におけるこのような中心母音の違いが、上代語のo₁・o₂を区別する根拠として活用された。

このように、漢字音研究は使い分けを究明するための材料として使用されてきており、o₁とo₂の使い分けは大概中心母音の相違によるものとして捉えられる。原音において区別があり、万葉仮名にもそれに相応するような区別がみえるので、上代語にもオ列に2種の母音音素が存在していたのは紛れのない事実のように受け入れられてきた。しかし、中国原音と上代語の一对一の対応には注意を払う必要があると指摘する研究者も少なくない。

上代特殊仮名遣いとは関係のないように見える元韻も、原音からみると、o₂と音声的に全く無関係というわけではない。本稿では、オ列の使い分けに対する全体像を明らかにするために、その一環として、焦点を元韻に当てて、o₂の全体的な性格について考えてみる。

2. o₂と元韻、魂・痕韻

元韻3等字は、その原音の中心母音が中国中古音はɐ、上古音はaとして再構される(董同龢1944・李方桂1980)。そして、元韻字の日本漢字音には、-a形・-o形・-e形の3種類が存在する。この中で、-en形は漢音として、そして、-on形は呉音として代表される。

例えば、呉音直読資料の『法華経音義』において、元韻3等字は、「建コム(居万)・建ゴム(後頓)・言ゴム(後尊)・軒コン(居但)・轆ケム(去千)…」のように現れる(小倉肇1995)。このように、日本漢字音にみえる3種類の字音形は、元韻の通時的な変化の現れであると考えられる。

元韻は原音において、魏晋南北朝時代(5世紀)に元韻と魂・痕韻とが混用されていた(王力1987)¹。例えば、王力(1987: 237)に示されている「三月曲水宴」では押韻として「尊・存・源…」等がある。これらの字は以下の韻に属する。

尊：魂韻合口1等

存：魂韻合口1等

源：元韻合口3等

魂・痕韻は、中国中古音において中心母音がəのように再構される韻であり、上代語としては「存」のように、o₂に用いられる韻である。つまり、このような原音の音声的特徴は、元韻字が上代語のo₂として用いられることも充分可能であったことを示唆する。

しかし、-on形に限るとはいえ、元韻字はo₂の表記として選ばれず、魂・痕韻のみo₂の表記として選択されている。o₂に使用された他の韻には介音を持っている字も多くあるので、元韻と魂・痕韻にこのような用法の差がみえる理由として、指摘できるのはɐとəという中心母音の違いがまず考えられる。

原音において元韻と魂・痕韻の音相に大差ないとすれば、理由は受容の過程で探るしかない。既存の漢字音研究としては、o₁・o₂を分けて表記し

た理由が原音における音相の違いによるということまでは突き止められたが、元韻をみると、ただそれだけではないことが指摘できるのである。

3. 中心母音の性格

中国中古音において、元韻は-*ieŋ*、そして魂・痕韻は-*ən*と再構され、中心母音の違いをみせる。このことから以下のような受容の過程を考えることができる。

元韻 *ie*(原音) > *o*(上代語)

魂・痕韻 *ə*(原音) > *o*₂(上代語)

呉音としては同音のように扱われているが、*o*列に2種の母音音素があったとすれば、上代特殊仮名遣いとしては別の音になる。当時の日本人が原音を受容して表記する時、原音で類似した音を、全く別の母音として捉えていたと考えることは合理性に乏しい。当然、同音として聴取されたはずである。

一般的に、*o*₁の中心母音は現代日本語のような*o*であったと考えられる。元韻の*ie*は*o*₂としては使用されていないので、表面上*o*₁と同じく母音*o*を有するものとして捉えられる。

*o*₁の表記に用いられている韻は以下のようなものである。

模韻 *o*²(または*uo*) 豪韻 *au* 冬韻 *uoŋ* 鍾韻 *ioŋ* 侯韻 *əu*(上古音は*ou*)

陽韻 *iuəŋ*

*o*₁に使用されていた韻をみると、中国中古音において比較的明瞭に*o*音を持っていた韻によって占められていることがわかる。なお、豪韻や陽韻をみると*au* > *o*のような受容も考え得る。ただし、侯韻に関しては、森博達(1991: 78)が、

〔侯〕韻は「斗」と「樓」がそれぞれ1例ずつ用いられているにすぎない。《中略》 α 群では「ト_甲」に、「斗」を除けば〔模〕韻字ばかり用いられており、「斗」は例外的印象が強い。

と述べるように、その数は非常に少ない。用例自体が少ないということは、 o_1 としての侯韻は上古音の影響であると考えられる。

上のようなことを考えると、元韻をなす介音と中心母音は、 o_1 に適しない韻であり、むしろ o_2 に近い音として聞こえたのではないかと思わせる。 o_2 は原音において、主として中舌的な ə のような中心母音を有する字が多い。以下 o_2 に使用された韻とその再構音を示しておく。

魚韻 $io \cdot i\text{ö}^3$ 之韻 $ii \cdot i\ddot{i}$ (上古音 $i\text{ə} \cdot i\ddot{\text{ə}}$) 蒸韻 $i\text{ə}\eta \cdot i\ddot{\text{ə}}\eta$ 登韻 $\text{ə}\eta$
魂韻 $u\text{ə}n$ 哈韻 vi (上古音 əi) 侯韻 əu

魚・之・蒸韻は3等字であり、中舌的であった介音および主母音を有すると言われる。なお、他の韻尾を持っている韻も共通的に中心母音が中舌的であると再構される。上代語の o_2 は中心母音の強い影響の現れ、また、3等字においては介音の影響も考え得る。

中国中古音で元韻の中心母音 e は a や a より、舌位が若干高い中舌的な母音である。なお、元韻には開口3等乙類・合口3等乙類しかないので、中舌的な中心母音および介音を考慮すると o_1 よりは o_2 に適する韻なのである。

繰り返しになるが、もし上代人が o_1 と o_2 を別の母音音素としてみていたら、上のような特徴を有する元韻は o_2 に近い音として認識された可能性が高いと考えられる。このような主張の裏づけとして、次節では韓国漢字音との比較を通して論を進める。

4. 韓国漢字音との対照

現代韓国語では母音音素として o と ə とを弁別している。このことは、古い時代でも同様であり、さまざまな資料をみて確認することができる。例

えば、『三国史記』には、地名を改めたことに関する記事が複数登場しており、このような用例から字音の相通について観察することができる。

嶺陽縣 本居知火縣 景德王改名 今因之（『三国史記』34）

道同縣 本刀冬火縣 景德王改名 今合属永州 新寧縣（『三国史記』34）

まず、「嶺」は元韻字であり、「居」は魚韻字である。韓国漢字音として両者は中心母音 ə で相通している。また、「道・同」は各々豪韻と東韻に、そして「刀・冬」は各々豪韻と冬韻に属しており、互いに中心母音 o で相通していることがわかる。

就中、元韻は韓国漢字音として韻母が ən で現れる。例えば、古代においては、上の「嶺・居」の例もみられるのであり、また、中世においては「建」のような元韻字の母音は韓国漢字音資料の「書経・易经・詩経・中庸・小学・千字文」で、 ən として現れる(河野六郎1979)。

以下、幾つか元韻開口3等に属する字と韓国・越南漢字音の比較表を示す。

<表1>

字	日本漢字音		韓国漢字音	越南漢字音
	呉音	漢音		
建	コン	ケン	$kən$	$kiên$
健	ゴン	ケン	$kən$	$kiên$
言	ゴン	ゲン	$ən$	$ngôn$
軒	コン	ケン	$hən$	$hiên$
献	コン	ケン	$hən$	$hiên$
憲	コン	ケン	$hən$	$hiên$
喝	カツ	ケツ	kal	$kiêt$
謁	アツ	エツ	al	$yêt$

韓国漢字音において元韻の母音は原則的にəで現れる(李潤東1997:166)。しかし、入声字にみえる-a形は、例外ではなく、上古音の名残であると思われる⁴。入声字を除けば、日韓の字音は-o形・-ə形で対応している。

また、越南漢字音で、例えば、「建」字はその字音形が/kiên/のように現れる(三根谷徹1993)。このことは漢音の-en形と時代的に対応している。越南漢字音は大概中国中古音における秦音以来の伝来した漢字音として理解できる。従って、呉音と韓国漢字音は秦音以前の姿を反映しており時代的にも相応していると言える。

韓国漢字音において、元韻3等字はその母音が一律的に/a/として投影されていることは上でも述べたとおりである。介音の影響もあわせて、中位低舌母音である/e/は後舌母音-o形よりは、主に中位中舌母音-ə形として現れる可能性が非常に高い。なお、このような字音形は、上代特殊仮名遣いのo₂の問題に示唆する点が多い。

とりわけ魚韻字は、o₂と一定の対応をみせる。以下、比較のために魚韻の一部とo₁に属する字とを示しておく。

<表2>

万葉仮名(o ₂)	韓国漢字音	万葉仮名(o ₁)	韓国漢字音
許	hə	古	ko
巨	kə	高	ko
去	kə	蘇	so
居	kə	素	so
語	ə	刀	to
諸	cyə	土	t ^h o
序	syə	怒	no
与	yə	用	yoŋ
予	yə	容	yoŋ
呂	ryə	路	ro

上代語においては、原音で中舌的な主母音を持つ字が、集中的に o_2 の万葉仮名として用いられている。このことを踏まえて、上代語に o_1 と o_2 の間に音韻的な弁別がくっきりと存在していたと仮定すれば、元韻字も o_2 の万葉仮名として選ばれたはずである。しかし、元韻字が日本語化する過程で o_2 の万葉仮名になるようなことはなかった。

古代における日本語と韓国語を同一視することはできないが、少なくとも両者が o と $ə$ とを音韻として区別できるという同一条件下におかれていたとすれば、このような結果は、 o_1 と o_2 の表記には音韻的要素より、ある程度固定化された表記方法としての機能が働いていたと考えられるのである。

5. 万葉仮名としての元韻字

元韻字は、万葉仮名としては基本的に o_1 と o_2 のどちらにも属しない一類である。元韻字が万葉仮名として使用された例を示すと以下のようなになる。

古事記：万マ・煩ボ・遠袁ヲ・番蕃ホ

日本書紀(β群)：煩ボ

万葉集：返反へ₂

上のように、元韻字は「マ・ホ・ボ・ヲ」といった唇音系の万葉仮名として使用され、牙音系としては適していなかったように見える。まず、上代特殊仮名遣いと関係しているのは、万葉集にみえる「返・反」であるが、 e_2 の万葉仮名として用いられているのが特徴的である。

このことに関して、高松政雄(1986: 122-123)では次のように述べられている。

元韻の唇音字「反」「返」は、後の所謂呉音漢音においても、多くは、オ段、ア段音(ホ・ハ)である中で、例外的にエ段音を採る字である。彼土では決してそうなる謂われのない字であるのに。とすれば、ここにて

逸早く同類のものと行を共にせぬ何らかの事情が潜んでいたのであろう。それは或いは偶発的であるかも知れぬけれども、目下はそれを確とは突き止め得ずに留っているものである。恐らくは、同撰内の先・仙韻に牽引されたものかと思われる。

一方、万葉仮名として注目されるのは、「ホ・ボ」である。この音節にも特殊な使い分けが存在するという主張もある(藤井茂利1972・馬淵和夫1957・福田良輔1966・1969)。例えば、馬淵和夫(1957)は「番・蕃」を甲類、「煩」を乙類として捉えている。一方、森博達(1991: 87-89)は、「ホ・ボ」の使い分けは認めないものの、「オ」だけは乙類相当の母音であった可能性が高いと指摘している。

前節で述べたように、元韻字は介音および中心母音の性格から o_2 として選ばれても差支えないと考えられる。もし「ホ・ボ」音節が o_2 として認められるのであれば、主に『古事記』にみえるホ音節だけである。

元韻字が o_2 として選択されなかった理由について考える際、介音と中心母音等の影響は既に言及したとおりなので排除できる。そうであれば、考えられる理由は韻尾の問題である。まず、 o_2 に使用された音仮名の中で、有尾韻字を全て調べると以下のようなになる⁵。

<表3>

o_2	字	韻	韻尾
コ ₂	興(コ・コゴ)	蒸開3乙	ŋ
	極(ココ)	蒸開3甲	k
	近(コノ)	欣開3	n
ゴ ₂	凝(ゴ)	蒸開3乙	ŋ
ソ ₂	曾(ソ)・僧(ソ)・増(ソ)・贈(ソ)・層(ソ)・憎(ソ)	登開1	ŋ
	則(ソ・ソo)・賊(ソo)	登開1	k
ゾ ₂	存(ゾ)・罇(ゾ)	魂合1	n
	賊(ゾ)	登開1	k

ト ₂	登(ト)・澄(ト)・等(ト)・騰(ト)・藤(ト)・鄧(ト)	登開1	ŋ
	得(ト・ト○・トコ)・徳(ト・トコ)	登開1	k
	滕(ト)	蒸開3甲	ŋ
ド ₂	騰(ド)・藤(ド)	登開1	ŋ
	特(ド)	登開1	k
	滕(ド)	蒸開3甲	ŋ
ノ ₂	能(ノ)	登開1	ŋ
ヨ ₂	×	×	×
ロ ₂	勒(ロ)	登開1	k
	稜(ロ・ロギ)	登開1	ŋ
モ ₂	×	×	×

* ×は該当する字がないことを意味する。

* 括弧の中○は連合仮名を表わす。例：則(ソ・ソ○)

上の表を見ると、o₂には喉内撥音韻尾ŋと喉内入声韻尾kが大多数を占めていることがわかる。そして、残りの舌内撥音韻尾nは「近・存・罇」にみえる。

まず、「近コノ」について大野透(1962: 492)は「いづれに於てもコ₂ノ₂シロ₂の表記に限られてゐる事に注意される。」と述べており、即ち「近コノ」は「近志侶・近之里」といった用例に限ることがわかる。

また、「存」について、大野透(1962: 234)は、「存は允恭記歌謡79に1例見えるが、主要仮名の叙と曾が助詞ゾ₂の表記に限られてゐるのに対し、特殊な変字存が特殊語のコ乙ゾ乙の表記に用ゐられてゐる事に注意される。」と指摘している。即ち、「存」の用例は『古事記』にのみ現れる用例「許存許曾婆 夜須久波陀布禮」に限る。最後に「罇」は『日本書紀』の「去罇去曾 椰主区泮娜布例」という用例に現れ、『古事記』と同様の歌謡である。

つまり、o₂を表わす場合には、n韻尾の字は比較的特殊な用法として用いられていたことがわかる。従って、意識的に選択されなかった可能性もあ

る。とりわけ、『日本書紀』歌謡ではn韻尾字の仮名使用を回避する傾向があるという(大野透1962:495)。元韻に属する字は、入声字以外は全てn韻尾を持っているので、このような傾向と無関係ではないと推測される。

n韻尾字はただの万葉仮名として使用されるのに何の支障もないのに、o₂に該当する万葉仮名に上のような傾向がみられるのは単なる偶然かもしれない。しかし、万葉仮名における韻尾の使用には何らかの傾向があると考えられる。

尾山慎(2007:26-27)では万葉仮名における韻尾の使用状況、特に略音仮名・二合仮名について調査されている。ここでの「ŋ・k・n」に関する説明を以下に示す。

ŋ：略音仮名が圧倒的に多く、字種も略音仮名のほうが多い。ng韻字は、略音仮名として主に機能する字音であったといえる。

k：二合仮名と略音仮名それぞれにおける音節数はほぼ拮抗しており、必ずしも韻尾は捨てられやすいとはいえないと考えられる。

n：略音はngのほうが、二合はmのほうが多い。二合仮名の用例数、また二合仮名と略音仮名のいずれにも使われる字種が他に比べて多いことからして、必ずしも韻尾は捨てられやすいとはいえないと考えられる。

このような説明をo₂の字に当てはめて考えてみる。k韻尾とn韻尾の共通的特徴は韻尾を捨てがたいことである。〈表3〉をみると、o₂としてのŋ韻尾は殆どが略音仮名として使用されている。

そして、k韻尾字は上に引用した万葉仮名の韻尾の使用状況を連合仮名・二合仮名で処理している反面、n韻尾字はその用例も少ない上に、二合仮名「近コノ」は決められた表現にのみ用いられている。

万葉仮名として元韻字は連合仮名(煩能ホノ)・二合仮名(番ホノ)としては問題なく使用されたにも関わらず、o₂にこのようなきらいがあるのは、o₂の表記に対する特殊な意識乃至思惑があったからであると思われる。

6. まとめ

以上、 o_2 を鳥瞰するために、元韻字という o_2 の周辺からアプローチしてみた。呉音として元韻は、 $-on$ 形という字音形をみせるが、ここには、原音からすれば o_2 に成りえたという可能性が秘められている。

元韻と魂・痕韻は、原音において音声的親近性を持っており互いに相通できた。従って、上代人にとって、 o_1 と o_2 に音韻的な違いが存在していたという仮定下で、上代人には元韻字も o_2 のように聴取された可能性が高いと考えられる。

このような可能性を裏付けるものとして、韓国漢字音の反映例をみると、元韻字は o_2 相当の母音をもって現れ、 o_1 に該当する字との間に、音韻的な対立をみせる。しかし、ホ・ボ音節の o_2 としての可能性は措くとしても、元韻字が o_2 として使用されることはない。

このようなことは、 o_1 と o_2 の使い分けが単に音韻的な違いによるものではない可能性を示すのであり、文字通り特殊な使い分けであった可能性もある。

そして、 o_2 の万葉仮名に元韻字が避けられていることは、 n 韻尾字が意識的に排除されていたためであると思われる。さらに、 n 韻尾字が特定の場合にのみ使用されるといった用法は、音の類似性から離れて、表記者の取捨選択も強く関与した表記方法であったと推測されるのである。

使い分けに使用された万葉仮名は上古音から中古音にわたる、中国漢字音の変遷を、比較的規則的に反映している。しかしながら、使い分けられた万葉仮名がそのまま上代語の音韻ではなかった可能性も充分内包していると考えられる。

注

- (1) 王力(1987:192)は魂部について「一等字来自文部、三等喉牙唇音字来自元部。元魂痕同用、…」と説明している。
- (2) 森博達(1991:88)は、「カールグレン氏は、日本漢音で<影>母字が「ヲ」と表わされることを重視して中古音を[-uo]と推定した。しかし、<影>母字以外は「古コ」・「素ソ」・「杜ト」の如く開口で表わされ、「クオ」・「スオ」・「ツオ」の如く合口で表わされてはいない。[-o]と推定する方が穏当であろう。」と述べている。
- (3) ただし、大野晋(1953:181)は、魚韻3等字の中心母音を a であったと再構する。
- (4) 類推音である可能性も排除できない。
- (5) 大野透(1962:391-394)に掲載されている表をベースに作成した。

《参考文献》

- 有坂秀世(1955)『上代音韻考攷』三省堂出版株式会社
- 大野透(1962)『万葉仮名の研究』明治書院
- _____ (1977)『続・万葉仮名の研究』高山本店
- 尾山慎(2007)「万葉集における略音仮名と二合仮名-韻尾ごとの偏向をめぐって-」
『文学史研究』47
- 河野六郎(1979)『資料音韻表』河野六郎著作集2 平凡社
- 高松政雄(1982)『日本漢字音の研究』風間書房
- _____ (1986)『日本漢字音概論』風間書房
- 橋本進吉(1980)『古代国語の音韻に就いて』岩波書店
- 早田輝洋(1998)「上代日本語の音節構造とオ列甲乙の別」『音声研究』2
- 藤井茂利(1972)「日本書紀の「ホ」音節表記について」『東海大学紀要 文学部』17
- 松本克己(1975)「万葉仮名のオ列甲乙について」『言語』5
- 馬淵和夫(1957)「『古事記』のシ・オ・ホのかな」『国語学』31
- 満田新造(1964)「朝鮮字音と日本呉音との類似点について」『中国音韻史論考』武蔵
野書院
- 三根谷徹(1993)『中古漢語と越南漢字音』汲古書院

森博達(1991)『古代の音韻と日本書紀の成立』大修館書店

福田良輔(1966)「古事記のホの仮名について」『創立四十周年記念論文集』九州大学
文学部

_____ (1969)「古事記の多元性について - 甲乙ホ音の存否をめぐって - 」『青山学
院大学文学部紀要』12

李京哲(2006)『日本漢字音의 理解』책사랑

李潤東(1997)『韓国漢字音의 理解』蜚雪出版社

王力(1987)『王力文集第十卷 漢語語音史』山東教育出版社

董同龢(1944)『上古音韻表稿』台聯国出版社

李方桂(1980)『上古音研究』商務印書館

李珍華・周長楫(1999)『漢字古今音表』中華書房

《參考資料》

小倉肇(1995)「法華經音義字音対照表」『日本呉音の研究』新典社

金正彬(2004)「安田八幡宮大般若波羅蜜多經分紐分韻表」『日本呉音と韓国漢字音の
比較研究』広島大学博士論文

沼本克明(1995)「観智院本類聚名義抄和音分韻表」築島裕編『日本漢字音史論輯』汲
古書院

古典研究会(1987)「妙法蓮華經釈文」『古辞書音義集成』4 汲古書院

古典索引刊行会(2003)『万葉集索引』塙書房

(い みんぎ・本学大学院博士後期課程)